

# 乳幼児期の言語発達に関する一考察

## 1. 自閉児の言語について

### A study of infancy language development —autistic children—

平 松 芳 樹

Yoshiki Hiramatsu

#### はじめに

人間の言語活動はその人の生活全般に深くかかわる重要な役割を果たしている。社会的活動や文化の伝承から個人の思考や行動の決定に至るまで言語によって支えられているといえよう。

したがって、言語についての研究は、言語学はもとより文化人類学あるいは生理学そして心理学など広範囲の分野で注目され、様々な角度からアプローチされている。

心理学における言語の研究は、知覚や認知あるいは学習や思考のような基礎的分野で伝統的に続けられてきている。一方、乳幼児からの言語発達は、児童心理学などの発達心理学の主要テーマのひとつとして熱心な論議の対象となり、実験的研究も展開されている。たとえば、ピアジェ (Piaget, J.) やヴィゴツキー (Vygotsky, L. S.) さらにルリア (Luria, A. R.) らの研究は著名である。また、言語学と心理学との境界領域として、心理言語学という研究分野も現われ、言語発達研究に新たな観点を与えてくれている。これらについては稿を改めて触れてみたい。

筆者の主たる関心は、乳児が言語を獲得するメカニズムに関することと、言語発達の障害、とくに自閉児の言語に関することである。本稿では後者について若干の考察を試みるものである。

#### 中国短大幼児相談室と自閉児

自閉症もしくは自閉的傾向を示す子ども(本稿では自閉児と称す)についての最初の論文は、1943年のカナー (Kanner, L.) の「情緒的接触の自閉的障害」であるが、その後多数の研究者から注目され、とくに最近の自閉児関係の文献は急速に増えており、関心の高さを示している。

筆者が自閉児と直接のかかわりをもつようになったのは、本学内に新しい建物が建築され、その一角に心理学準備室とプレイルームが設置されたことを契機に「中国短大幼児相談室」を開設した1979年(昭和54年)からであり、まだ日は浅い。しかし、来談ケースのうちのほとんどが自閉傾向の問題を主訴としていることには驚かされ、自閉児をもち悩む親たちが身近に多いことを知った。

次の表は、幼児相談室の来談者のうち自閉児と考えられるケースについて、来談当初の年齢、性別と主訴を一覧したものである。

幼児名	性別	年齢(養護年月)	主 訴
1. D.K.	男	2:10 (1979. 4)	ことばがいない。気ままな行動をする。
2. H.O.	男	3:08 (1979. 4)	多動で会話をしたがらない。友だちと遊べない。
3. E.H.	男	2:09 (1979. 6)	ことばが遅れ、他の子と遊ぼうとしない。

- |         |   |                |                             |
|---------|---|----------------|-----------------------------|
| 4. Y.K  | 男 | 3:00 (1979.11) | ことばがはっきりしない。わがままである。        |
| 5. T.Y. | 男 | 4:04 (1980. 5) | 話がスムーズに行かない。人より物の方に興味が大きい。  |
| 6. H.K. | 女 | 5:01 (1981.10) | 単語はあるがことばが遅れ、生活習慣も身につけていない。 |

いずれもことばの問題が第1にあげられていて、社会性や対人関係の支障をそのつぎに訴えて来談されているのである。

表のうち、1.3.4.のケースは、当幼児相談室へ約1年間定期的に来談の後、通園施設や保育園に入園したものである。1979年および1980年の岡山心理学会にプレイルーム内の行動分析の試みとして報告したが、この概要については後に記すこととする。また、5.のT.Y君は、1980年5月以来、2年半以上にわたり継続来談中であり、1983年春には小学校入学が予定されている。1982年12月現在、幼稚園の年長組に通園中でかなり適応が良くなっている。このケースについても後述する。

#### 自閉児の概念

「自閉症」という用語を子どもに使うようになったのは、カナーの論文が発表されて以来のことであるが、1943年の論文では、11の症例を自閉的障害として詳細に報告しただけであって翌年の「早期幼児自閉症 early infantile autism」というタイトルの論文にはじまる。

カナーは、成人の精神分裂病が子どもの時期に発現したものとみており、次のような特徴を示すとしている。(隠岐, 1982)

1. 既往歴に器質的障害が疑われるようなものがない。
2. 発病は人生の最早期で、緩徐性である(少なくとも乳児期)。
3. 症状経過の中で、幻覚、妄想などの病的体験は認められていない。
4. 家族的背景には、特記すべき精神障害の負因はない。両親の学歴は高いが、一定の情緒的にシュトゥンプな点、こだわりやすい点、などの共通傾向が認められている。
5. 男児、ことに第1子に多発し、性比は約4:1である。

次に具体的症状として、①対人関係の極度の孤立、②ことば・行動の特異さ、③事物への偏った関心、④埋もれた知的閃き、概念のひ弱さ、⑤とりつかれ動作にみられる同一性保持のための強い欲求、をとりあげている。さらに、1944年にこれらの症状の源泉的障害は、①極端なひとりぼっち、②同一性保持への強迫的なとりつかれ欲求、の2点に集約されるとしているのである。

カナーとほとんど同時期に、オーストリーのアスペルガー (Asperger, H., 1944) が「自閉的精神病質 autistischen Psychopathen」という論文を発表している。アスペルガーの自閉児の基本的障害は次の3点とされる。(隠岐, 1982)

1. 生来的に対人関係を保つ力が稀薄である。
2. 社会機構の中での一員としては、外界との関係づけに欠け、社会化が十分ではない。
3. 共感性が稀薄であることをユニークな特徴としている。

そして具体的特徴として、①容貌は整いおとなびている。多動であるが、子どもらしい生命感情にあふれた活発さはみられない、②心情の表出・表現としての指標であるまなざしがうつろとなる、③身振りやその他も奇異である、④自他の意志の交流の媒体であることばの本来的機能が失われる、⑤社会化の基盤をなす生活の基本的習慣の形成が十分ではない、⑥子ども自身の内に、いわゆる彼らだけで、かつ、独特な創造的興味・関心が自生し、かえって、ますます

す行動は奇妙となり、社会化されにくくなる、と指摘している。

カナーもアスペルガーも、基本的障害として自閉性をとりあげ、まわりの人々との感情交流がうまくゆかないという対人関係の障害を認め、言語面での発達も障害されてくるように共通点が多く、本質的には同じ障害を扱っていると考えられる。しかし、原因と治療についての考え方は鋭く対立している。すなわち、カナーは精神病の中で扱い、治療も一般精神障害に準じて行なうのに対し、アスペルガーは疾患とはみないで、素質的な性格の変形ないしかたよりと考えて治療的教育が必要だとしている。

また近年では、アメリカのリムランド (Rimland, B., 1964, 1980) が、基本的にはカナーの立場に従いながら、原因については独自の仮説をたてて検証を試みている。それは脳機能の障害を推論する「脳幹網様体異常説」とよぶべきものである。そして自閉症診断用のチェック・リストである Form E-2 を作成し、近縁疾患との鑑別を精力的に試みている。

一方、イギリスのラター (Rutter, M., 1968, 1978) やウイング夫妻 (Wing, J.K., Wing, L., 1966, Wing, L., 1976) などによって、「言語・認知障害説」が唱えられてきた。この主張は、言語および認知機能の障害が自閉症の基本的障害であり、極端な孤立のような対人関係の発達障害や、同一性保持などの異常な行動などは二次的障害であるとするのである。

上述のもの以外にも自閉症に関する研究は多彩であり、原因・治療に対する考え方も種々試みられている段階で、未だ確定したものがないのが現状である。筆者には、ラターやウイングらの考え方が有力なものと思われる。治療についても、行動療法的手法を取り入れて、二次的障害をまず軽減することから始めて、基本的障害の治療的教育を推進する必要があると考える。

### 自閉児の言語

さて、上述の諸説の中で、自閉児の言語の問題はどのように扱われているか、もう少し詳しく具体的に検討しておきたい。

まず、カナーが指摘したことばの発達の異常には、次の10項目があげられている。(平井, 1968)

- a. ことばの発達遅滞 ( $\frac{2}{3}$  の患児は話すことができるようになるが、 $\frac{1}{3}$  の患児は終生ことばが出現しない)
- b. 繰返し言語 repetition
- c. 独語 monologue
- d. 緘黙 mutism
- e. 反響言語 echolalia
  - i) 直接的反響言語 immediate echolalia
  - ii) 遅滞性反響言語 delayed echolalia
- f. 無応答 no response
- g. 抑揚とアクセントの欠如
- h. 自発的な文章構成の欠如および、反響言語による再生の結果、特異な文法による文章ができあがること。
- i. 人称代名詞の逆転すなわち 1 人称と 2 人称との混同
- j. 比喩的な言辞を示す

次に、アスペルガーが、言語に各種の特徴があるとした内容は次の通りである。(平井, 1968)  
「音調が甲高く金切り声の時もあるが、声が微かで囁くように話すこともある。あるいは、

上品な鼻声で話すこともある。音声の抑揚は単調であり、能力のない俳優が台詞を棒読みにするような具合である。あるいは、話す文章に切れ目がなく、歌を繰り返すような話し方をすることもある。あるいは、過度に調子が狂っていることもある。言語からうける印象は、不自然であり、極端な感じがする。質問をする際にも、その時々の場合に応じての質問ではないので突拍子もなく感ぜられるし、相手が忙しい時にも一向構わずに問いかける。相手が聞いていてもいなくても、平気で話し続けたりする。」

最後に、ウイングは話しことばについて次のように述べている。(ウイング, 1977)

「自閉症児は話しことばを理解するうえで障害がある。それは、まったく理解できないというひどい障害から、単語とか語句のもつニュアンスや連想を理解することができないために語句を具体的にしか解釈できない、という軽い障害まで、幅広い範囲にわたっている。また、話しことばを使用するうえでも異常がみられる。一生涯ことばをしゃべらないままの人たちも少数ながらいる。しゃべることのできる子どもでも、即時および遅延性の反響言語があり、それだけがわれわれが耳にすることのできる唯一の話しことばである場合もある。わずかながら自発的な話しことばのある子どもたちは、つねに代名詞の使用の点で混乱を生じている。多くの子どもたちのなかに、文法構造上の未熟さ、発達性感覚性ならびに表出性言語障害にみられるような異常、またことばや文章を反復的でステレオタイプの融通性のないやり方で用いる傾向がみられる。特徴として、音声の高さと大きさ、抑揚などをコントロールすることが非常にへたである。自発的な話しことばの場合、発音のしかたにしばしば問題がみられるが、そのことは反響言語には見られない。ろうの子どもや発達性感覚性言語障害をもつ子どもと違って、自閉症児は自分たちのことばの障害を補うために、ジェスチュアを使いはしない。彼らはどのような形態の言語も、またコミュニケーションの非言語的手段についてもその理解と使用の点で劣っている。」

自閉児の言語の特徴が三様に記述されているのであるが、いずれも音声の調子がおかしいこと、抑揚がなく調子はずれであり、繰り返し言語がみられたり、紋切型の話し方であることを指摘している。コミュニケーションの手段としてのことばの機能を無視して、自己完結的で独自の使い方をしているようである。ことばは、まわりの人とのやりとりの中で発達するものであるから、放置していると、自閉児の言語はますます発達が遅れたり、偏倚な傾向を強めることが予想される。筆者らの幼児相談室の子どもたちのうち1人はことばのないケースであったが、その他のケースにはことばがあった。しかし、その声の調子は高いものが多く、反響言語・繰返し言語が頻繁にみられた。比較的事ことば数の多いT児には、反響言語・繰返し言語のほかに、代名詞の混乱がみられた。

#### 幼児相談室の子どもたちの言語

はじめに一覧したケースのうち、No. 1, 3, 4について、言語面の特徴を中心に概要を報告する。前の2ケースについては、行動分析として発声・発語の頻度を調査している。その方法は次の通りである。プレイルーム内には子どもとセラピストがいて、隣室から共同研究者がテレビカメラで記録をとる。後でビデオテープの録画を見ながら行動を分析する。30~60分間の記録の中で出てきた発声・発語は逐一書きとめて集計する。2名で同時に聞きとり、平均値をとるようにして、1分間当りの発声数・発語数を算出した。記録者に意味の分かる単語を発語とし、意味不明の奇声や意志表示とみなされない発声を、了解不能な発声とよび、要求や拒否の態度と対応している発声を、了解可能発声とよんで区別した。

(1) D.K.君

2卵性双生児の兄として出生。来談時2歳11ヵ月で保育園に通園していたが、多動でサクを乗り越えたり目を離せないといわれて通園をあきらめた経過がある。保育園の先生と目が合わないともいわれた。胎児期、出産期、乳児期に特筆すべき問題はなく順調であったという。病院で脳波測定をしているが異常なしとされている。双生児の兄弟で違っていたことは、乳児期に本児の方は手がかからなかったし、ひとみしりがあまりなかった。弟の方は手がかかりひとみしりもあった。弟は「パパ」「シッコ」「ブーブー」などの単語がいくつかいえるが、本児は時折「アー」とか発声するが、ほとんど無音である。名前を呼ばれても無関心であった。

行動分析の結果は、来談当初をⅠ期とし、半年後をⅡ期、さらに半年後をⅢ期として次表に示す。表中の数字は1分間当りの発声または発語数。カッコ内は代表例。

	Ⅰ 期	Ⅱ 期	Ⅲ 期
了解不能発声	0.47(ア,アー,アハ,ウなど)	0.40(フン,ウン,イヤウなど)	0.95(アイジャ,パヒャ,ダッダッダ)
了解可能発声	0.10(アー,アッア)	0.10(ウー)	0.27(エイ,イー)
発 語	な し	な し	0.22(ハイ,パパ,タカイタカイ)

Ⅰ期・Ⅱ期ともに発声数は少なく、発語は全くなかったが、Ⅲ期には発声のレパートリーも増え数が多くなって、3種類の発語があった。この子のしゃべったことばをはじめて聞いた時は大変感激したものである。最近ではかなり多くのことばが言えるようになったということである。

(2) E.H.君

M病院から autistic child と診断され、当相談室へプレイセラピーの依頼で紹介されたケースである。妊娠・分娩も異常なく、身体発達は標準的であり、既往歴もなく順調であった。1歳頃に呼んでもふりむかない、他の子どもに関心がなく、スイッチやミニカーに固執性があり、目を離すとどこにでも行ってしまおうという問題行動がみられるようになったという。

本児の言語の特徴は、来談初期の発声数がまことに多いことである。発声は多いが意味のある単語はきわめて少なく、発語としてカウントした内でも数字がほとんどという状態であった。Ⅱ期になると発声数は激減し、発語がやや増加する。Ⅲ期には有意味語のレパートリーは増え2語文もみられるようになった。(数字は1分間当りの発声または発語数)

	Ⅰ 期	Ⅱ 期	Ⅲ 期
了解不能発声	10.03 (ア,デー,イヨ,ビー,ハ)	1.19 (チュム,ヨイヤ,アジャエ)	0.77 (エー,アー)
了解可能発声	1.07 (ニー,サン,シー,ゴー,ロク)	0.37 (エー,アー,オー)	1.00 (アー,パー)
発 語	0.20 (数字を書きながら対応し てニー,シー,ゴー,ハチ など)	1.02 (ドラエモンやウルトラマンの 歌,1~12の数字,チョウダイ フネ,トケイ,キシヤポッポ)	5.04 (自分の名前,体の部分名,指の 名,パンザイ,アリガト,セン セイ,オトウサン,ナデナデ)

プレイルーム内では紙に書くことが好きでよく書いている。絵かき歌でタヌキなどを描くこともあったが、大半は数字、時計、ひらがな、ローマ字であった。

最近では、ことばの遅れはまだあるが、友だちとも遊べて、他の子とほとんど変りなくなったということである。数字に関心が強い面は依然あって、カレンダーを暗記していて、○月○日は何曜日かと問うとちゃんと答えられるという。

(3) T.Y.君

4歳4ヵ月で初来室。注射をされるかと思ってプレイルームに入るのをいやがる。両親一緒に遊べるということ入室した。母親は克明なメモを持参し、生育歴、問題行動などを早口に

熱心に説明する。正常分娩、身体発達面では特筆すべきこともなく順調であったが、8ヵ月頃実家の母が、両親から離れても泣かない本児を不審がる。呼んでもふりむかない、笑いが少ないなど気になるので、大学病院や児童相談所をおとずれている。

行動療法のチェック・リストとして作られたCLAC-Ⅲを実施した。結果は、運動能力、着衣の2点でやや得点が低い他は問題なく、自閉傾向はごく軽いものと思われる。

しかし、来談時の訴えのように、会話がスムーズに行かない、興味の範囲が狭く数字にこだわる、友だちと遊ばないなど気になることも多い。初語が計算器の数字であり、ママ、パパでなかった点も問題ではないかということである。

そこで、一般的な発達検査である乳幼児精神発達質問紙(津守・磯部)により発達状態を調べたところ、興味深い結果を得た。運動と生活習慣の項目はともにDA(発達年齢)4歳で、DQ(発達指数)91とまずまずであり、探索はDA3歳、DQ68と低く、社会性はDA3歳未満で測定不能のため、低年齢用を使い2歳と出た。ところが、言語のDAは6歳を示し、DQ136という高指数であった。そしてこの言語発達の内容が誠にアンバランスであった。質問紙構成者の意図では、「会話・伝達」を3～4歳に達成し、5歳で「文字言語のレディネス」ができて、6～7歳で「文字言語」に達するようになっているのであるが、本児の場合、3～4歳の低い発達水準を達成しないまま、次の段階の文字言語の世界へ入って行ったのである。「話しことばを發展させ、ことばで意志や感情、経験を伝えあう能力」(津守・磯部、1965)が不完全なまま、文字や数字の読み書きができるようになっているのである。

プレイルーム内の行動(T.Y.児)

T.Y.児は、前の2つのケースより年長ということもあって、ことばの数は多く獲得しているものの、その本来の機能を活用できないのである。プレイルーム内で観察されたいいくつかの具体例をあげておきたい。

課題を決めて訓練を始めようとしても、指示通りの行動をとらず、自分のやりたいことに固執する。たとえば、絵本を読んであげるからイスに座って手はおひざと指示しても、イスには座れるが読んでもらうのはいやで、自分で読もうとする。ひらがなの読み書きができるので、かなりすらすら読むが内容にはほとんど関心がないようであり、話のすじをつかむことはできない。本読みの課題を日課にしようと絵本を用意して待っていると、「今日は本を読まない」と先手をうってくる。

数字や音符に興味がある。絵本を手にとると内容ではなくページを確かめる。分厚い本が何ページまであるか確かめる。何冊もとり出して一心にページを繰り、止めさせようとしても仲々むつかしい。楽譜が好きで、ト音記号、ヘ音記号がわかり、何本加線があっても音階名を正しくいえる。歌唱は歌詞でうたわなないで音階名でうたう。

時間にこだわる。幼稚園のチャイムが何時何分に鳴るということをよく知っている。プレイルームでも、今何時かと頻繁に尋ねる。3時に帰宅する約束なのでそれが気になるのである。昼寝の時、5時に起きる予定を寝過ぎたことがあり、5時が戻らないとカンシャクをおこし、1時間近く泣き続けたことが何度かあったという。

自分の気に入らないことや、思い通りにならないことがあり、寝不足などが重なると、強いカンシャクをおこす。地団駄を踏み、顔を赤くして「パミー・パミー」などの新造語を叫ぶ。

楽器の演奏は巧みであり、描画も好きである。ピアノ曲も両手で弾けるが、幼稚園の合奏は独走する。絵の中に数字や時計がよく描かれる。交通標識もお気に入り。迷路を自作するのに熱中することがあり、その時期のノートは迷路だらけとなる。しかし、描画内容に人物が多く登場するようになった頃、プレイルーム内の行動にも落ち着きがでてきた。

自分がしてもらいたいことがあると「何々してほしい」（代名詞逆転）と表現する。「してちょうだい」と訂正されると、反響的に言うが、再び「してほしい」を使う。別れのあいさつも促がされて手を振って「バイバイ」と言うが、反響的であり顔を合わすことは少ない。

最後に、認知協応動作に関することであるが、屋外でキャッチボール遊びを試みたがうまくできなかった。ボールの動きを目で追いながら自分の動作を合わせることは相当難しいようである。ボールの方を見ようとしなかったり、受ける時に目を閉じてしまう。野球（三角ベース）をしても、ルールがのみ込めないことと、競争意欲がないので楽しめない。戸外の運動は汗をかくのを嫌ってあまり長く続かない。

以上の例にみられるように、自閉児特有の行動傾向や言語の特徴が顕著であったのであるが、2年半を経過して、問題行動は消失してはいないが、しだにおだやかな形になってきていると認められる。これは、本児の成長と親の養育態度の変容および幼児園での集団生活の経験などが、相乗的に作用して改善されてきているものと評価できよう。

### 結 語

自閉児に関する文献をいくつか対比的にみながら、中国短大幼児相談室に来談したケースのうち3つをとりあげて、言語面の特徴を中心に状態像や原因について検討してみたのである。

自閉児たちはかなり共通した行動面の特徴を示し、言語においても特異な発達をしている。その状態像は言語圏を超えた共通性があり、このことは文化の型づけをされる以前の生物学的レベルの障害が原因となっていることを予想させる。

自閉児とのプレイの中で、しばしば振りまわされる感じを持つたり、予測しがたくて困惑するような行動をみることがある。この原因のとらえ方としては、言語・認知障害説の主張するように、言語を含む認知的障害が最初にあって、そのために対人関係などに支障をきたしているとする考え方が妥当であろうと思える。

幼児期の社会性の発達にとって重視されることに、まわりのおとなや同年齢の子どもたちとの交渉や、日常生活習慣の習得があるが、自閉児はそれらが苦手なのである。状況に変化が生じるとはげしく抵抗するのは、自分の認知の枠組からはずれる出来事は大変不安なのであろう。泣いたりカンシャクを起こすのは、こうした不安に対する唯一の対抗手段であらう。同一的な状況の中では安心できるので、D君は同じ服装に執着し、お気に入りのおもちゃを片手から離そうとしないのである。積木や人形は一列に並べては箱に入れ、また一列に並べる遊びを繰り返す。部屋のスイッチを点滅させたり、水道の水を流して遊ぶのである。E君やT君も同じ様な傾向がみられる。年長のT君は大型積木をトンネルや階段にみたくて遊べるような発展性がみられる。しかし、この遊びも毎回の変化を楽しむのではなく、毎週ほぼ前回と同じ形に再現されないと機嫌が悪い。カレンダーに詳しいE君や、時計・本のページに敏感なT君にとっては、法則性がある予測可能な、暦・時刻などの文字や数字の世界は安全であり、常に関心を持つので得意な分野となる。これに対し、思い通りになってくれない人間は自閉児にとって苦手な存在である。ボール遊びも予測がつきにくいので苦手である。イヌやネコなどの動物も、勝手に動きまわるので得意ではないが、T君にとってはネコが良い友だちになった。人間の友だちよりも自由になるし、ことばが不要だからであらうと思われる。小動物を与えることは、自閉児の状態にもよるが、問題行動改善に効果がある方法かもしれない。

今後の研究課題としては、自閉児の言語と平行して、対照群としての障害のない子どもの、標準的発達を少し詳細に検討する必要があると感じている。また、幼児相談室も長期的視野に立って治療教育のプログラムを確定することが急務である。

## 文 献

- Asperger, H. Die "autistischen Psychopathen" im Kindesalter, *Arch. Psychiat.*  
:Nervenkr., **117**:76-136, 1944.
- 平井信義, 小児自閉症, 日本小児医事出版社, 1968.
- 平松芳樹・北川歳昭・綱島啓司, 自閉児への接近(I)プレイルーム内の行動分析の試み, 岡山  
心理学会第27回大会発表論文集, 1979,
- 平松芳樹・北川歳昭・綱島啓司・矢吹典子, 自閉児への接近(II)発声・発語・集中あそびの変  
化, 岡山心理学会第28回大会発表論文集, 1980.
- 津守 真・稲毛教子, 乳幼児精神発達診断法, 0才~3才まで, 大日本図書, 1961.
- 津守 真・磯部景子, 乳幼児精神発達診断法, 3才~7才まで, 大日本図書, 1965.
- カナー, L., 牧田清志訳, Autistic disturbances of affective contact. *Nervous Child*  
**2**:217-250, 1943. 精神医学 **18**:777-797, 897-906, 1976.
- 隠岐忠彦, 自閉症の人間発達学, 誠信書房, 1982.
- Rimland, B., *Infantile autism*. Applenton-Century-Crafts. 1964.
- リムランド, B., 熊代 永ほか訳, 小児自閉症, 海鳴社, 1980.
- Rutter, M., Concepts of autism; A review of research. *J. Child Psychol. Psy-*  
*chiat.*, **9**:1-25, 1968.
- ラター, M., ショプラー, E., 編著, 丸井文男監訳, 自閉症 その概念と治療に関する再検  
討, 黎明書房, 1982.
- Wing, J.K., Diagnosis, epidemiology. In: *Early childhood autism; Clinical,*  
*educational and social aspects*. (ed.) Wing, J.K. (1st ed.) 3-49, Oxford & London  
: Pergamon Press. 1966.
- ウイング, L. 編, 久保絃章ほか訳, 早期小児自閉症, 星和書店, 1977.